

博物学と地図収集ネットワーク

上杉和央

一 文化としての地図収集

古地図を文化的な側面からとらえる研究は、これまでも数多くなされてきた。それは古地図の研究書に「文化」を冠する書名が多く見られることから明らかだろう^①。

なかでも海野は、『東西地図文化交渉史研究』や『地図の文化史』といった書名からもうかがえるように^②、「文化」にこだわって地図の検討を行ってきた一人である。海野は地図の系譜関係やその移動を丹念に追いかけて、その展開を論じていく手法を得意としてきた。このような系譜を精査していく分析は、地図史研究において一九七〇年代までにその基礎が確立しており、海野の研究の前後にもきわめて豊富な研究蓄積がある^③。海野の業績は、そのような成果を「地図文化」ないし「地図の文化」史として再変換し、地図「から」当時の歴史をとらえようとした点において、高く評価できるものであり、現在の地図史研究の一つの到達点を示していると言つてよいだろう。

その一方で、海野らの議論では地図が常に文化の中に所与の存在として付置されており、各時代の文化全体における地図の位置づけをう

かがうことが難しくなるという問題をほらむ。文化の中で地図を相対化してとらえる試みとして、古くは鮎澤の『坤輿万国全図』をめぐる議論がある^④が、このような視点が意識されて盛んに分析され始めたのは一九八〇年代以降である。その代表として、たとえば観光文化との関わりで地図を説いた矢守の議論を挙げることができるが、近年では三好や小野田が、石川流宣や橋本玉蘭斎、歙形蕙斎といった絵師の作製した地図に焦点をあてて絵画史と地図の関係を積極的に論じ、この分野の研究を牽引している^⑤。また、出版文化の伸長に即して地図史の展開を検討する試みもなされるようになった^⑥。

海野らが地図の系譜、すなわちタテの関係を重視して文化を論じたのに対し、これらの研究は地図と他の文化的事象との関連性、すなわちヨコの関係を重視したものと言えるであろう。古地図を文化的な側面から論じるとき、このタテとヨコの視点に本来優劣はなく、補充しあうものであるはずである。ただし、タテの視点からの研究が古くから膨大に蓄積されている一方で、ヨコの視点からの検討は、主な業績の多くが近年なされたものであることから分かるように、まだまだ十分とは言えない状況にある。本稿ではこの点を強く意識し、ヨコの

視点から古地図をとらえていくことにしたい。

検討を試みるのは、江戸時代、とりわけ十八世紀の地図収集についてである。筆者は、これまで十八世紀の国学者本居宣長（一七三〇—一八〇二）や日本地図史上最多の地図を作製した森幸安（一七〇一—没年不詳）、大坂天満宮祝部であった渡辺吉賢（一七〇三—没年不詳）などに焦点を当て、彼らのような知識人層が盛んに地図を収集・作製していたこと、さらに彼らが地図収集のネットワークを形成していたことを確認してきた。⁸ また、近年、有坂が木村兼葎堂（一七三六—一八〇二）の地図収集やその方法について同様の指摘を行っており、⁹ 十八世紀の知識人の間で地図収集がまさにある種の「文化」的営為となっていた状況が浮かび上がってきた¹⁰ つある。

しかしながら、地図収集と他の文化的事象とのつながりは依然としてあいまいなまま残されていると言わねばならない。たとえば筆者は前稿で渡辺吉賢と中心とした地図収集ネットワークを明らかにしたが、¹⁰ 地図にしか焦点が当てられていなかったために、その成果はともすれば「地図おたく」ないしそのネットワークを明らかにしたとしか見えかねないのである。

有坂は兼葎堂の地図収集が文人交流や考索のためであったとしており、¹¹ 地図収集が地図それだけを目的にしたものではなかったと論じている。この指摘によれば、十八世紀の他の文化的事象と地図収集とが何らかの関連性を有する場合があったと想定できるが、具体的な検討は課題として残されており、十分に判明しているわけではない。

この点について、筆者も前稿のなかで触れる機会があった。すなわ

ち、吉賢の地図収集を論じる過程で、吉賢が「異物あつめ」、すなわち地図以外の産物の収集で評判を取っていたことについても、ごく僅かに言及していたのである。¹² ただし、前稿執筆の段階では、そのことの持つ意味について十分に理解できておらず、その分析は一切できていない。

このような反省点もふまえつつ、本稿では十八世紀の知識人が何を収集していたのか、またその収集ネットワークはどのような構造であったのか、という点を明らかにし、そのなかに地図収集を位置づけていくことを目的としたい。

二 地図収集家の別の顔

(一) 渡辺吉賢の薬物会出品

まずは前稿で取り上げた人物、すなわち百枚以上の地図を収集し、森幸安などと地図の貸借を盛んに行っていた渡辺吉賢の「異物あつめ」から見ていこう。この「異物あつめ」という表現は、安永六年（一七七七）に繁栄堂から刊行された「富貴地座位」という評判記のなかに見えるものである。

（史料二） 渡邊氏の異物あつめなど、又兼葎堂の唐好もともに同うして、萬物に事をかかずありなんと…（後略）¹³

吉賢の所蔵品については、所蔵地図の一部を除いてまったく伝わっ

ていないため、「異物あつめ」の全貌を把握することは現時点では困難である。ただし、その一端に迫ることができる資料として、宝暦十年（一七六〇）四月に戸田旭山（二六九六—一七六九）主導のもと大坂で開かれた「薬物会」の出品目録『文会録』（二七六〇刊）¹⁵、および宝暦十二年に平賀源内（一七二八—一七七九）が東京で開催した「薬品会」の内容を載せる『物類品隲』（二七六三刊）¹⁶を挙げることでできる。これらの中には、吉賢の名前を確認することができ、吉賢が薬物会・薬品会にいくつかの産物を出品していたことが分かるのである。

ここで言う薬物会・薬品会とは、宝暦期（一七五二—一七六四）に催されるようになった薬物やその他の産物を集めて展示する物産会のことである。その嚆矢は宝暦七年七月に江戸で開かれた薬品会であり、主催者は田村藍水（一七一八—一八七六）であった（表一）。その後、江戸では平賀源内など藍水の弟子によって物産会が執り行われるようになる。旭山の薬物会は大坂で初めての物産会であり、『文会録』の序には、江戸での盛會に刺激を受けて大坂で開催することを決めた、と記されている。この薬物会には、大坂のみならず江戸や京都、長崎、水戸、越中、尾張、讃岐などから百一名の参加者があり、これまでになく大規模な物産会となった。そして、この大坂での成功に呼応して、源内はさらに大規模な物産会を企画し、第五回東都薬品会（宝暦十二年）では三十余ヶ国から千三百余の品物を集め、展示した。このように、宝暦期を通じて、物産会は三都のみならず全国規模で鼓動するような文化的営為となっていた。

表1 18世紀の博物的関心の高まり

和暦（西暦）	事項
宝永六（一七〇九）	貝原益軒『大和本草』
正徳三（一七一三）	寺島良安『和漢三才図会』
享保五（一二二〇）	
～	吉宗・薬草見分
宝暦三（一七五三）	
宝暦七（一七五七）	田村藍水 第一回「東都薬品会」
宝暦八（一七五八）	田村藍水 第二回「東都薬品会」
宝暦九（一七五九）	平賀源内 第三回「東都薬品会」
宝暦十（一七六〇）	松田長元 第四回「東都薬品会」
	戸田旭山 薬物会（大坂）
宝暦十一（一七六一）	豊田養慶 薬品会（京都）
宝暦十二（一七六二）	平賀源内 第五回「東都薬品会」
明和元（一七六四）	平賀源内 第六回「東都薬品会」

さて、『文会録』にある「会例」のなかに、次のような文章が見える。

（史料二）御出座御望の方ハ草木金石蟲魚鳥獸等の薬食乃用に立る物一両種御携へ御出可被来候。会席狭く候間、三種とハ御出し被下間鋪候。其内金石等ハ重高二無之候間、数多ニても不苦候。乍然、己後八年々一度づ、断ず相企候間、数多御貯御坐候ハ、永々御出し可被下候。但し遠方ハ重ての会に御出座之程も難斗候間、いか程ニても御勝手に可被成候。

尤草木の長大なる
ハ枝を御打、花瓶
に御さし御出し可
被成候¹⁷⁾

薬物会で持ち寄られたものは「薬食乃用に立る物」であった。全国からの応募を受け付けたが、一人あたりの出品数については、会場の狭さを理由に、主催者の旭山（五十点出品）以外の者は原則として二点までの出品に限られた。「文会録」に見える百一人中八十四人までが一、二品の出品数であり、この原則はかぎり厳格に守られていたことが分かる（表二）。なお、十八世紀後半を代表する大坂の「知の巨人」¹⁸⁾、兼葭堂（木村吉右衛門）も出品者に名を連ねていたが、当時はまだ二十代であり、その出品数は

表2 宝暦10年「薬物会」における出品数別参加者数

出品数(品)	参加者(人)	主要人物[出身等]
1	39	
2	45	木村吉右衛門[大坂] = 兼葭堂
3	10	田村元雄[東都] = 藍水
4	1	池田玄文[高松侯薬園宰]
5	1	渡辺主税[天満] = 吉賢
6	2	平賀源内[讃州人寓学于聖堂, 高松侯賜学資月俸数口]・直海元周[平安]
8	1	藤田養菴[播州明石]
20	1	森野賽郭翁[和州松山]
50	1	戸田旭山[会主]

『旭山先生 文会録』をもとに作成

一般出品者と同じ二点であった。

その一方で、表二にあるように三点以上を出品している者も確認できる。先の「会例」に見えるように、出品数に関しては二つの例外規定があり、金石のように小さなもの、もしくは遠方よりの参加者については二点以上の出品が認められていた。規定に従えば、三点以上の出品者はこのいずれかの理由に当てはまる者でなければならぬ。しかし、大量出品者の名前とその出品物を見る限り、実際にはこの例外規定とは別のルールによって、規定以上の出品数が認められた場合があったことがうかがえる。

たとえば、讃岐から出品した十一名中、三品以上出していたのは平賀源内と高松侯の薬園管理を任されていた池田玄文のみであり、江戸からの出品も田村藍水と官医の藤本立仙の二人しかいない¹⁹⁾。また、「遠方」とは言い難い京都から直海元周が六品を、同じく「遠方」ではない大和から森野賽郭が実に二十品も出品している。直海元周は、宝暦九年に『広大和本草』を刊行していた人物、森野賽郭は大和国に広大な薬草園を所持する人物で、畿内における本草の中心人物の一人であった。

このように、三品以上を出した顔ぶれを見ていくと、遠方であれば誰でもが三品以上出せるというわけではなく、また金石類に限って三品以上出せるというわけでもなかったことが分かる。実際に規定以上とりわけ四品以上の出品をしたのは、この分野に精通している人物のみであったのである。旭山は一般の参加者に対しては二品までという規則を強く求めた一方²⁰⁾、主要な人物については、例外規定に関係な

く二品以上の出品を認めることで、薬物会での優品展示および会全体の權威を確保していたと考えられる。

この点をふまえたとき、表二にあるように、吉賢が五品を出品していることは注目に値する。この出品数は『文会録』に「叙」を寄せた元周、「跋」を寄せた源内とほぼ同じであり、吉賢が薬物会における主要な参加者であると認知されていたことが分かる。吉賢は宝暦年間の大坂にあって、博物学的関心を有した知的集団の主要人物の一人であったのである。

この時、吉賢が出品したのは、植物や鉱物、貝類、菌類であり（表三）、多岐に渡る種類の物産を所持していた。安永期に「異物あつめ」の評判をとった吉賢であったが、宝暦期にはすでに多様な物産を収集していたのであり、またそれが同じ関心を持つ者たちとの間で知られていた、ということになる。

吉賢の出品物の中で、もっとも遠方

表3 渡辺吉賢の薬物会出品物

出品物名	『文会録』内注記	備考
朱崖芝	松前産エブリコ 直海氏云、此物ノ名朱崖懸志ニ出ツト	菌類：サルノコシカケ科のキノコの類
鶏頭雄黄		植物：ケイトウの一種
紫石英		鉱物：紫水晶
寶石		鉱物：津軽舍利。津軽の海中から取れる石
石介		貝類：イシガイの一種

『文会録』をもとに作成

から収集されていたのは松前産の「朱崖芝」エブリコであった（表三）。エブリコについては、後年ではあるが大槻玄沢の『六物新志』（天明六年（一七八六）刊）の中に登場する。この書は六種の珍しい薬種を考証したもののだが、噎蒲里哥（エブリコ）は、一角（ウニコウル）、泊夫藍（サフラン）、肉豆蔻（ニクスク）、木乃伊（ミイラ）、人魚とともに、珍種の一つに計上されており、吉賢の収集品が珍しいものであったことがうかがえる。

さて、先にも触れたように、薬物会の二年後の宝暦十二年には、第五回東都薬品会が源内によって開催され、全国から千三百余の産物が持ち寄られた。その時の出品物が掲載される「物類品隲」には次のように見え、吉賢が琉球産壁虎魚（クモガイ、図一）を出品していたことが分かる。

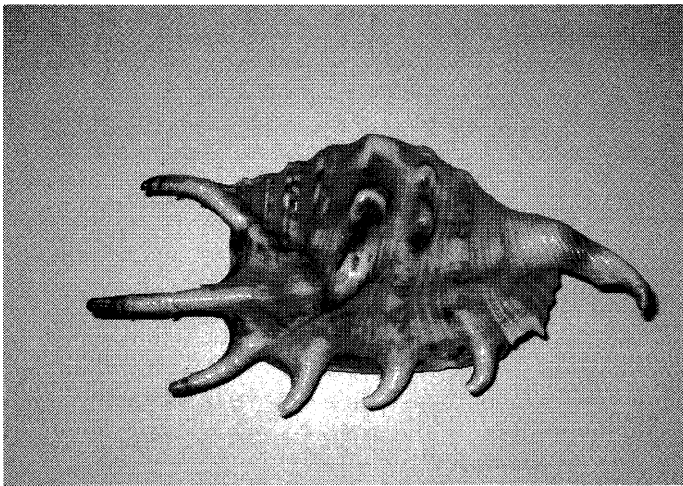


図1 クモガイ

(史料三) 壁虎魚 和名クモカヒ、中山伝信録曰、螺殻上五六爪ヲ生ス、

形壁虎ノ如ク、壁虎魚ト名ス。琉球産、壬午「宝曆十二年」

客品中、浪花渡部主税之ヲ具ス⁽²²⁾

(一)「内は筆者、以下同」

実は、『物類品隲』における出品者掲載は制限が設けられていた。『物類品隲』の凡例をみると、

(史料四) 客品、数十品を具すと雖も、珍異の種に非ざれば、則ち具する者の姓名を挙げず⁽²³⁾

と記されており、珍しい種類でなければ所有者の名前は記さない方針で編纂されていた。実際、本文中に出品者名は三十一名しか確認することができない(表四)。吉賢はその一人に挙げられていたのである。逆に言えば、吉賢の所有した琉球産壁虎魚は珍異だったということであり、全国から千三百余もの出品があった第五回東都薬品会においても、吉賢の所蔵品は一定の注目を集めた、ということができらるだろう。

表4 『物類品隲』に登場する人物一覧

	名前	在所(職)	『文会録』	『東海濟勝記』
1	田村藍水	東都	○	○
2	平賀源内	東都	○	○
3	後藤黎春	東都	○	
4	松田長元	東都	○	
5	古河章輔	東都	○	
6	能勢氏	東都		
7	岡田養仙	(官医)	○	
8	山田氏	(官医)		
9	青木昆陽	(官儒)		
10	中島利兵衛	武蔵国		
11	藤友才	下総国		
12	白石松徹	下野国		
13	高木竹庵	信濃国		
14	清玄一	駿河国		
15	清春達	駿河国		
16	川合小才	遠江国		
17	三宅儀兵	美濃国		
18	沢東宿	(郡上侯医官)	○	
19	氷室左近	尾張国	○	
20	杉田玄白	(小濱侯医官)		
21	渡辺吉賢	(大坂天満宮祝部)	○	○
22	喜右衛門	大坂		
23	内田七右衛門	大和国	○	
24	松井和泉	大和国(奈良墨商)		
25	三浦迂齋	播磨国		(作者)
26	関口氏	紀伊国		
27	多田孫助	讃岐国		
28	三好喜右衛門	讃岐国	○	
29	細川重賢	(熊本藩主)		
30	山本利源	長崎		
31	吉雄幸左衛門(耕牛)	(長崎紅毛通詞)		

(二)「いとこのめる人」

源内と吉賢の間には、薬品会以前からの交流を認めることができる。明和元年(一七六四)十月付の自序を持つ源内自筆の稿本『浄貞五百

介図』（東京大学史料編纂所蔵）によってその出会いを振り返ると、次のようになる。

宝暦十年、源内は高松藩主松平頼恭（一七一―一七七）の命によって相模や紀伊で貝の採取を行った。そして、そこで収集した貝の同定のために『五百介図』（吉文字屋浄貞作）なる図譜を捜すこととなったが、『五百介図』は珍書でなかなか見つからなかった。所蔵の情報を受けて大坂に向かったが、当該の人物はすでに亡くなり、書物も焼失したと聞かされ、源内は非常に落胆してしまった。吉賢のことを聞くのは、ちょうどそのような時であった。

（史料五） 同し所「難波」なる天満神の社の神主渡邊のちからてふ人「吉賢」かのふみをもたりと聞て即行くとへは、いとこのめる人にてはやくこそつたへて書置たるめれ。しほつ、の翁といふハかゝる類ひならんとおほへてひとりよろこほひつ、おとりぬへし。かれことをつくしふかくこひてうつし得しかハさぬきにまいりて貝と共にまいらせけり

源内は吉賢が所蔵していると聞き、早速訪ねてみると、吉賢は「いとこのめる人」であったので『五百介図』を「はやくこそつたへて書置」いていた。ようやく捜し物に出会えた源内は、吉賢を「しほつ、の翁」すなわち記紀神話で困ったものを助ける神として登場する塩土老翁であるかのようにだと深く感激している。そして深謝しながら写本を作成し、讃岐に持ち帰り、貝と一緒に藩主に献上した。

宝暦十年といえは、四月には旭山の薬物会が開催された年であり、源内もそこに出品していた。しかし、この月に源内は先の藩命により相模で貝採集を行っており、大坂には品物を送っただけで本人自身は参加していない可能性が高い。宝暦十年の秋まで、源内と吉賢に直接の面識はなかったとみてよいだろう。

『浄貞五百介図』の自序には、源内の師であった賀茂真淵による添削が加えられている。添削後の自序は史料五の引用通りのだが、添削前の文章を確認すると、「いとこのめる人にて」の部分は「いと貝をこのめる人にて」（傍点は筆者）となっている。旭山の「薬物会」に石介を（表三）、また第五回東都薬品会に壁虎魚を出品していることから分かるように、吉賢は稀覯本の貝類図譜を所蔵するのみならず、実際に貝類の収集を積極的に行っていた。源内による「いと貝をこのめる人」という評は、この点において的確であると言えよう。

ただし、先の物産会での出品を見ても分かるように、実際の吉賢は貝類以外の産物も収集していた。真淵が吉賢のそのような状況を知った上で添削したかどうかは定かではない。ただ、結果的に見れば、真淵添削後の「いとこのめる人」という語句は、吉賢の全体像をより適切に表現したものとなっている。また、『富貴地座位』に見えた「異物あつめ」を好むという社会的な評価とも一致している。

以上の点をふまえれば、前稿でとらえたような地図収集家という吉賢像は、きわめて限定的な側面からしか捉えられていないものであったことが分かる。本来の吉賢は、「異物あつめ」を「いとこのめる人」であったのであり、地図のみを収集するような性向ではなく、貝類を

中心として、植物、鉱物、菌類と多種多様な範囲に関心を広げ、収集を行っていた人物であったのである。

なお、『浄貞五百介図』には吉賢の序文が寄せられていることから、両者の関係は明和年間頃に至るまで続いていたことが分かる。また、同書は兼葭堂も所蔵していたことが知られている⁽²⁴⁾。吉賢と兼葭堂、源内の間にはそれぞれ交流があったのであり、兼葭堂や源内にとつての吉賢は、同好の先達として知られる人物であったことになる。

三 知識人の博物学的関心と地図

地図のみではなく、多様なモノ、すなわち博物を収集することが、吉賢だけにみられる行為なのであれば、そのような収集の理由は吉賢の個人的志向にすぎないとして片付けることができる。しかし、十八世紀中〜後期を見渡すと、吉賢と同じく博物に関心を持って収集し、その一環に地図が位置づけられるような者を数多く見出すことができる。以下、幾人かの事例を挙げて、そのことを確認することにしたい。

(一) 博物文化の牽引者たちの収集体

これまで度々触れた源内と兼葭堂は、吉賢の一世代後に生まれ、それぞれ十八世紀後半の博物文化の展開に大きく寄与した人物であった。彼らが地図に関心を寄せていたこと自体は、すでに指摘されていることであるが、先行研究において博物的関心の中における地図の位置づけがほとんど検討されることがない点を考えれば、ここで最低

限の確認をしておく必要はあろう。

まず、源内について見ておく。すでに取り上げた『文会録』や『物類品鑑』には、源内の収集した産物も掲載されている。また江戸での薬品会の主催者であったため、『薬品会主品目録』という目録に源内の全五十種の出品物が掲載されている。これらを見ると、源内は紫草や鼠尾草（タムランウ）といった植物、金剛石や自然銅といった鉱物、貝子（タカラガイ）や紫貝といった貝類など、多岐に渡った収集活動を展開したことが分かる。

そのほか、源内は先述の『浄貞五百介図』のような図譜についても収集していた。『浄貞五百介図』の場合、吉賢に模写を許された源内は写本を二部作成し、一部は讃岐藩主松平頼恭に献上したが、もう一部は自分の手元に置いていた。また、長崎通詞を通じて洋書の図譜も購入していた。これら洋書の図譜は、源内自

表5 『物産書目』に掲載された図譜

『物産書目』に記された名称	該当書目
1 紅毛本草	ドドネウス『草木誌』
2 紅毛魚譜	ウイラビー『魚類誌』
3 紅毛禽獸魚介蟲譜	ヨンストーン『動物図譜』
4 紅毛花譜	スヴェールツ『花譜』
5 紅毛介譜 石譜附	ルンフィウス『アンボイナ島奇品室』
6 紅毛蟲譜	スワンメルダム『自然の聖書』
7 世界図	ブルックネル『新海洋世界図』
8 百工秘術	プリューシュ『自然の景観』

『物産書目』に記載された順番に表示している。

『物産書目』より作成

作の『物産書目』（表五）という蔵書目録で確認でき、ドドネウス『草木誌』（一六四四刊）やヨンストン『動物図譜』（一六六〇刊）といった西洋博物図譜を手の内にしていたことが分かる。『物産書目』に六冊目に記された『紅毛蟲譜』の欄末尾には「右六帖草木禽獸魚蟲介石悉備」とあることから、源内があらゆるジャンルの西洋の図譜を所蔵しようとし、そしてそれが達成されたと感じていたことが分かる。

さらに、この『物産書目』には注目すべき点がある。それは六冊の博物図譜が記されたあとに『世界図』が挙げられていることである。この『世界図』については、二〇〇三―二〇〇四年に香川県歴史博物館ほかで開催された「平賀源内展」の中で、ブルックネルの『新海洋世界図』（オランダ語版、一七五九年刊）（図二）であることが初めて明らかにされた²⁶。一七四一年のベーリングの探険の成果も反映されており、当時の日本で入手可能な世界図としても正確なものの一つであった。

（史料六）是ハ世界ノ図委相分申候古今之珍書、阿蘭陀之新板物九年前ニ出来候書、去年八年ぶりにて一萬三千里の所より手に入候古今之珍物に御座候

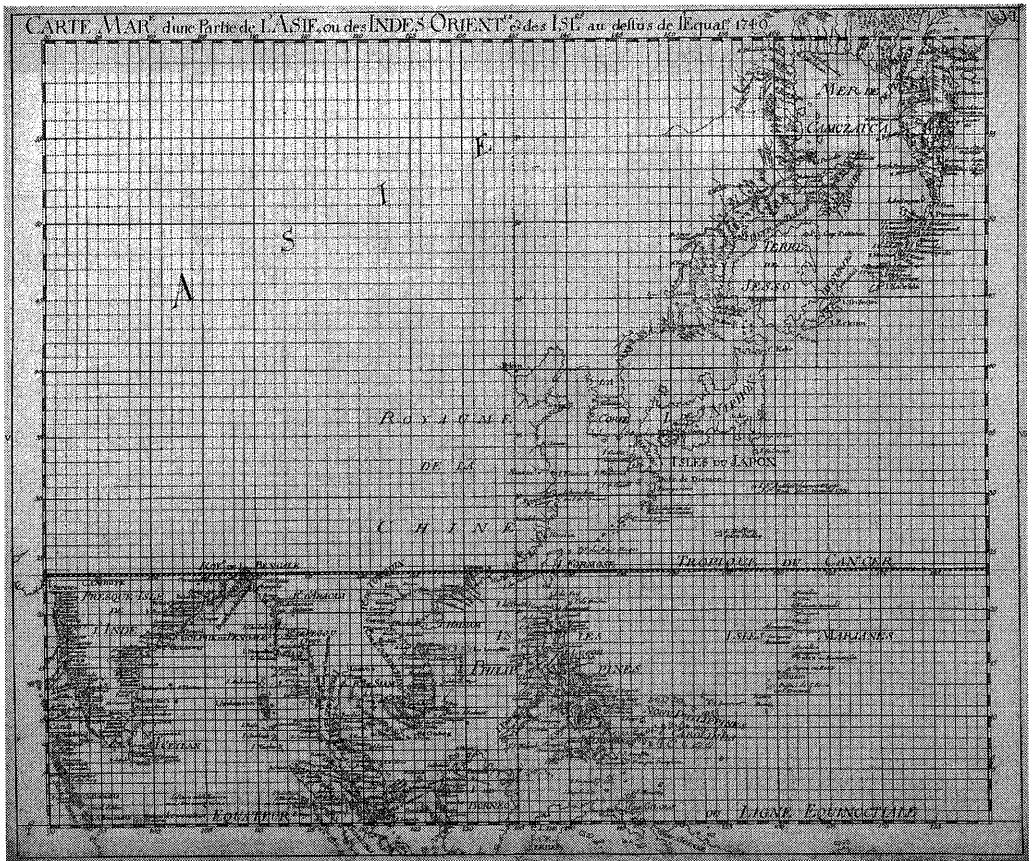


図2 ブルックネル『新海洋世界図』（東アジア部分）
近畿大学中央図書館蔵

史料六は「世界図」についての源内の評であり、源内自身もこの図を世界の委細が正しく記されたこれまでにない珍書と評している。

長崎通詞を通じて手に入れたということは、源内が強く請い、時には数年越しで手に入れた書物であったことに他ならない。源内は動植物等の詳細な博物図譜と同時に、詳細な地図（世界図）をも望んだのである。そしてそれらが「物産書目」に併記されていることから、源内が地理に関する知識を物産の理解、ひいては博物学的探究に不可欠なものにとらえていたことがうかがえる。

次に兼葭堂の収集活動について確認しておこう。兼葭堂の自伝内には「収蔵ノモノ」が次のように列挙されている。

（史料七）本邦唐山金石碑本、本邦古人書画、近代儒家文人詩文、唐山人真蹟書画、本邦諸国地図、唐山蛮方地図、草木金石珠玉虫魚介鳥獸、古銭、古器物、唐山器具（奇ヲ受スルニ非ズ、専ラ考索ノ用トス）、蛮方異産
右ノ類アリトイエドモ、ミナ考索ノ用トス。他ノ艶飾ノ比ニアラス。⁽²⁷⁾

（一）は割注、以下同

このように、兼葭堂は実に多彩な文物を収集していたが、その収集対象に「本邦諸国地図」や「唐山蛮方地図」が含まれており、地図に對しても高い関心を示していた。そのことは、例えば最古の刊行京都図である「都記」（京都大学附属図書館蔵）に兼葭堂の落款が認めら

れることや、兼葭堂旧蔵「和蘭新定地球図」（大阪府立中之島図書館蔵）が、日本で作製された半球型世界図において先駆的な一枚として位置づけられること⁽²⁸⁾などからも分かる。

兼葭堂の地図収集については、近年、有坂によって分析が加えられ、交友のあった古河古松軒（一七二六—一八〇七）、蠣崎波饗（一七六四—一八二六）、大原吞饗（一七六一—一八一〇）、最上徳内（一七五四—一八三六）、高橋景保（一七八五—一八二九）といった人物との地図のやり取りがあったか、その予定があったことが指摘された。また、吉賢の実子である渡辺吉豊（信濃とも。一七三八—一八二二）とも地図の貸借をしていたことが、同じく有坂により指摘されている。⁽²⁹⁾

その他にも、たとえば総州葛飾郡関宿藩久世広明家臣の池田正樹（生没年不詳）の手による『難波晰』には、兼葭堂との対話を記す箇所に「蝦夷図一枚借得て写す（但三枚有、其内にて此図佳に近しと）」⁽³⁰⁾とあり、兼葭堂が所持していた蝦夷図を池田が模写していたことが分かる。⁽³¹⁾ また大田南畝（一七四九—一八二三）との問答書「遡遊従之」には、南畝が応永二四年と康正二年の年紀を持つ「大坂の古図」以外に古図があるのかを兼葭堂に尋ねたところ「兼葭堂ヨリ古図数葉ヲ借与ス」とあり、⁽³²⁾ 兼葭堂が浪速古図などの「古図」を数葉所蔵し、それらを南畝が借り受けた旨が記されている。⁽³³⁾

また、土佐藩納戸役植田桂南（通称清之丞。一七三二—一七八八）にあてた年不明（天明元年か）十一月二十三日付けの書簡では、次のようにある。

(史料八) 然者御約束仕候政刑大観十二本、四国山川図奉差上候、外
二四国分国有之候へとも不宜候故、此図上ヶ申候³⁶

これより、兼葭堂が「四国山川図」を所持しており、さらに他の四
国の地図の出来は「不宜」という評価をしていたことが分かる。史料
七にあるように、兼葭堂の文物収集は「考索」のためであったが、収
集した地図に対しても、実際に厳しい目を向けていたことがうかがえ
る。

もちろん、「考索」を目的とした収集は、地図に限ることではなかつ
た。実際、貝についての図譜作成を企図し(『奇貝図譜』)、またウニコー
ル(ユニコーン)についての研究書を著す(『一角纂考』)など、収集
品を用いた考索を行っていた。地図についても、文人交流や考索のた
めの収集であったことが有坂によって確認されており、この点にお
いても地図がその他の収集品と区別された形跡はない。

以上から分かるように、十八世紀後半の博物文化を代表する源内と
兼葭堂のいずれもが、地図に対して強い関心を持っていた。そして、
その関心は趣味的領域を越えており、他の収集品と同じく考索、言い
換えると博物学研究に通じるものであった。

(二) 地図を好んだ弄銭家

次に、前稿で吉賢と同じく「図を好む」人物として言及した松前商
人の宇野宗明(生年不詳—一七七四)について見ていく。宗明につい
ては、自筆資料や所蔵図などが確認されていない。そのため、地図収

集という観点から見れば、前稿以上の指摘を行うことは難しいと言わ
ざるを得ない。しかし、「古銭」というまったく別の分野に関する資
料のなかに、その名前を数多く見出すことができるのである。

芳川維堅(生没年未詳)が天明二年(一七八二)頃に記し、寛政五
年(一七九三)に刊行された『和漢泉彙』(国立国会図書館蔵)の例
言には、宗明と古銭の関係について、次のような記載がみえる。

(史料九) 余「維堅」幼稚ノ時ヨリ。古銭ヲ好ミテ。宇野翁ヲ師ト

シ事ヘテ。コレヲ鑑識^{メキキ}スルコトヲ学ベリ。翁姓ハ宇野名ハ
宗明。俗称九郎兵衛。大坂ノ住ナリ。此人十三歳ヨリ。古
銭ヲ好ミ。七十餘ニテ。安永三年甲午八月ニ物故セララル
マデ。其愛玩セラルルコト。六十年一日ノ如シ。故二天下
ノ珍銭トシテ。家ニ貯ヘ蔵ザルハナク。又諸家ノ珍藏トイ
ヘトモ。此翁ノ鑑賞ヲ経ザルハナシ。(中略) ……宜ナル哉。

世以テ弄銭家ノ中興ト称スルコトヲ

作者の維堅は、宗明に師事して「鑑識」を学んだ人物である。そして、
宗明のもとにはあらゆる古銭が集まり、また諸家の珍藏品も必ず宗明
の鑑賞を経たものであると述べ、宗明を古銭学を中興した人物と讃え
ている。弟子からみた師の評価であり、慎重に判断せねばならないが、
宗明を江戸中期の古銭学の重要人物とする理解は『嬉遊笑覧』
(一八三〇)³⁸でも確認することができ、宗明の古銭収集および古銭
に対する知識が、当時の世間において広く認知されていたのは間違い

ない。津軽・松前の通用商人であった宗明は、古銭分野において一角の人物であったのである。

宗明は古銭に関するいくつかの著作を残しているが、そのうち明和五年（一七六八）八月の年紀のある『古銭表目』³⁹は、「予所持古泉目次也」と記されており、宗明が所持した古銭目録であったことが分かる。そこには、たとえば「二品 和同開珍」というように、各古銭が種類ごとに、その所持数とともに記載されている。わずかでも違う部分があると、小項目を立てて記してあり、合計何種類を所持していたのかを厳密に求めることは難しい。しかし、小項目を無視して単純に数えるだけでも、その種類は一千近くに及び、質量ともに非常に優れたコレクションであったようである。

また、維堅は『和漢泉彙』のなかで次のようにも記している。

（史料十）翁本ト商家ニ生レテ。無文字ナリシガ。銭学ニ志篤クシテ。

竟二本邦六国史及ビ二十一史等ヲ涉獵シテ。少シニテモ銭

学ニ益アランコトヲ考索セラレケル

この文章より、宗明の古銭収集は単なる趣味という枠にとどまるものではなかったことが分かる。学的な探求心を持って、「銭学」に有益な資料を博搜し「考索」することで、古銭に対する知識を身につけていったのである。

実は、古銭は薬品としての効用が期待されるものであり、本草学の対象の一つとしても知られるものであった。たとえば、先にも取り上

げた『物類品隲』には次のように説明されている。

（史料十二）古文銭 此モノ目疾ヲ治スコト妙ナリ。其ノ外効用多シ。

東璧曰ク、但五百年之外ノ者ヲ得テ、即チ用ベシ

東璧とは日本の本草学に多大な影響を及ぼした『本草綱目』の著者、李時珍（一五一八—一五九三）のことである。李時珍が「五百年」以前に作られた古銭としていのであるから、『物類品隲』が記された頃から見れば六百〇六五十年よりも前に鑄造された古銭になるであろうか。そのような古銭は多様な効用があるという認識が当時の知識人の中にあつたことが分かる。ただし、あらゆる古銭収集が薬効を期待したものであつたわけではない。日本の本草書として大きな役割を果たした貝原益軒『大和本草』（一七〇八）にも「銭」は項目立てられているが、『本草綱目』の説などを引用した後、次のように記される。

（史料十二）大凡上代人力を以作れる物、今まで久しく伝はれるは銭

より古きはなし。故今好事の者、和漢の古銭を多く集めて玩ぶ事世に盛なり⁴⁰

ここから、当初薬物として収集されていた古銭であつたが、十八世紀初頭には収集それ自体に関心が寄せられつつあつたことがうかがえる。この傾向は十八世紀中葉にも続いており、たとえば『物類品隲』に「薬用ニ関ラザルモノ、今之ヲ略ス」と記されていることから分か

るように、薬用としての古銭はもちろん、薬効がないとされた時期に
鑄造された古銭も薬物会・薬品会に多数出展されていたことが分かる。

このような古銭収集が盛んな中であって、宗明はその中心的人物と
して認知されていたのであり、単なる趣味的な収集にとどまらず、夥
しい種類の古銭について真贋を吟味し、そして体系だった分類を作り
上げるという、学問的まなざしをもって、古銭収集を行っていたので
ある。

(三) 博物学的探究と地図

古銭の収集家が地図にも造詣が深い事例は、他にも見られる。たと
えば、宗明に先行して古銭収集で名をなした大坂の人物に、中谷顧山
(生没年不詳)がいる。彼は『孔方図鑑』(一七二八刊)や『古銭図譜』
(一七二九刊)といった古銭の図鑑類を出版しているが、享保二十年
(一七三五)刻、元文元年(一七三六)刊『改正 和泉国大絵図』に「浪
華中谷顧山撰」とあり、地図の撰者をも担うことがあったことが分
かる。⁽⁴²⁾

また、宗明の没後に古銭学を牽引した人物の一人に、『和漢泉彙』
内で維堅に「古泉之賞鑑同好」と評された、福知山藩八代藩主朽木昌
綱(一七五〇—一八〇二)がいる。

宗明が残した著作のうち、もっとも著名かつ重要なものは『統化蝶
類苑』という古銭を網羅的に解説した書物であるが、この書は昌綱の
求めに応じて宗明が作成したものであった。昌綱による『和漢泉彙』
への序文に次のようにある。

(史料十三) 師宇野宗明古泉を翫ぶこと久し…(中略)…所謂統化蝶
類苑安永癸巳年宇野翁予の需に應て撰するところ也

ここで昌綱は「師宇野宗明」という表現を用いている。実際の師弟
関係にあったかは一考を要するが、自分よりも二世代ほど上の宗明
に対して昌綱が一日置いていたことは疑いない。

昌綱の記した『新撰錢譜』(一七八二刊)によると、古銭収集家に
は二種があると言う。一つは、他人の評価によって古銭を楽しむ「好事」
であり、もう一つは自らその真偽を判断しつつ精品を得ていく「賞鑑」
である。昌綱は十三歳頃(一七六二)に古銭への関心を持ち始めたが、
徐々に「好事」的弄銭家から「賞鑑」的弄銭家へと展開していき、古
銭研究の道を究めていった。その中で到達した理解が、『改正珍貨孔
方図鑑序説』(一七八五撰術)に記されている。

(史料十四) 夫古泉ノ目利ハ、其銅ノ精鍊ヲ知ハ云フニ及バズ、第一
ニ地理ヲ察シ、其国々ノ銅色ヲ知、第二ニ文字ノ新古、
時代ノ書法ヲ正、第三ニ世々ノ盛衰、土地ノ貧富ヲ考ベ
シ

ここからは、古銭研究と地理に関する知識が密接に結びつくという
昌綱の意識を明瞭に見て取ることができる。実際、昌綱は「好事」的
な古銭趣味が始まって数年経った明和六年(一七六九)頃から、地理
学にも関心を持ち始めたと考えられている。

さらに、その三年後の安永元年（一七七二）頃には前野良沢に入門し、蘭学の勉強を始めた。天明三年（一七八三）に昌綱が『蘭学階梯』のために記した序文には、昌綱が蘭学を志した理由が記されている。昌綱は、これまでの中国にのみ依拠したために狭隘な知識しか得られなかったことを批判し、次のように述べる。

（史料十五）中国は大いに天地の情に反す。ただこれ識なくしてみづから限るのみ。寡人そのかくのごとき「中華思想の狭い地理理解」を傷み、密かに慮るに諸邦の地理を詳らかにして以て起こさば、則ち病医すべきなりと。乃ち広く諸書を求む。支那の諸編は、みづからその耳目を限りて、取りて論ずるに足らず……思へらく和蘭人は万邦に通商し、必ず詳らかにする所あらんと。⁴³

この時点で、昌綱は古銭研究の補助としてではなく、「地理」そのものへ関心を示すようになっていた。そして、そのような関心が、西洋地理書への傾倒につながっていったのである。

西洋地理書に学んだ成果は、寛政元年（一七八九）の『泰西輿地図説』刊行に現れた。それは地動説を日本で初めて紹介した刊行書として、⁴⁴また「純学術的な権威と価値を持つ」⁴⁵世界地理書として評価されており、日本の地理学史上、欠くことのできない一書となっている。

これまで地理学内における昌綱の評価はこの『泰西輿地図説』のみを取り上げたものであった。しかし、今見たように昌綱が蘭学ないし

西洋地理書に傾倒した背景として、古銭への関心があった点は重要であろう。実際、『泰西輿地図説』の刊行前には『新撰錢譜』や『改正珍貨孔方圖鑑序説』、刊行後には『泉貨分量考』（一七九〇）や『弄錢奇鑑』（一七九六）を記しており、古銭学から地理学へと関心を移したのではなく、古銭学から派生する形で地理学ないし地理的知識が希求されていたのである。

このように蘭学の知識を吸収しつつ古銭を収集した昌綱だが、史料十四で昌綱の説いている「古泉ノ目利」に地理的な知識が重要性とする姿勢は、宗明にもはっきりと見て取ることができる。たとえば、宗明の『統化蝶類苑』内「相州 藤沢新銭」項には次のような記述がある。

（史料十六）江戸深川銭ハ最潤緑也……此藤沢銭銅色黒色ヲ会ム、七條銭ヨリ潤緑、伏見鑄ハ背潤緑ニテ格別也

ここには銭の銅色を地域比較という視点からとらえる宗明の姿がある。宗明が依拠した知識は基本的に中国および日本の書物からもたらされたものであり、昌綱のように蘭学に深く傾倒することはなかったが、古銭学と地理学を関連させている点はまったく同じである。宗明の持っていた古銭へのまなざしと地理へのまなざしをともに尖鋭にしたのが昌綱の態度であったと評価できるだろう。

また「古泉ノ目利」のうち、第二・第三は歴史的な視点であり、産地（＝地理）と同時に鑄造年代（＝歴史）にも大きな注意を払っていることが分かる。そして、この地理と歴史を同時に重視する態度も「本

邦六国史及び二十一史等ヲ涉獵」した宗明に当てはまることを確認しておきたい。

昌綱と宗明との交流が深いものであったことは先に触れたが、両者とそれぞれに交流した人物の一人に兼葭堂がいる。

天明六年（一七八六）の十月三日付の昌綱による兼葭堂宛書簡が残されており、そこには、昌綱が兼葭堂から古銭を買い入れることで自らの古銭コレクションが充実した旨が記されている。また史料七にあるように、「古銭」は兼葭堂の収集対象の一つであった。

一方、兼葭堂の日記のうち同年十月二十日条に「奈良屋九郎兵衛〔古泉持参〕」、一二月二四日条に「奈良屋九郎兵衛〔古銭持参取引〕」という記事が見え、兼葭堂の古銭収集品の一部が、宗明の所持品に由来するものであったことが分かる。宗明は安永三年（一七七四）に没しているため、この「奈良屋九郎兵衛」とは宗明の後を継いだ者であろう。兼葭堂はその者から宗明の収集した古銭を「取引」によって手に入れたのである。ただし、先の昌綱の書簡からは兼葭堂も生前の宗明と面識があったことがうかがえる。

このように、ともに地図を好んだ宗明、昌綱、兼葭堂の三者の間には、古銭を介した交流があったことになる。

四 宝暦の博物ネットワーク

貝収集における吉賢・源内・兼葭堂の関係や、古銭収集における宗明・昌綱・兼葭堂の関係から敷衍すれば、前稿でとらえた地図収集のネット

ワークと同じように、各産物についての収集ネットワークを想定することができる。ただし、これまでの検討をふまえるならば、一人の人物が一つの産物を収集するといった限定的な収集でなかったことは明らかであり、個別の産物ごとの収集ネットワークというよりも、博物全体の収集ネットワークないし博物的関心を持った者たちの交友ネットワークを論じていくべきであろう。

このような博物収集のネットワークが一瞥して分かるような資料はなく、いくつかの資料をつなぎ合わせて、その断片に迫っていくしかない。幸い、宝暦期に開催された物産会には、全員もしくは一部の参加者が判明する資料が残されている。その他いくつかの資料も使用して、宝暦期の博物収集のネットワークの一端を確認していくことにしたい。

(一) 博物収集のネットワークの構造

表六は、宝暦十年に戸田旭山が主催した薬物会に参加した百一名を列挙し、さらに他の物産会関係や日記等に名前が見えるかどうかを調べた結果を示したものである。

先にも指摘したように、この薬物会では二品までという出品制限があったが、何名かの人物についてはその制限を超えた出品が確認できた。その人物らはいずれも宝暦十年当時、産物の収集がよく知られていた人物であった。表六は人物を地域別に出品数の多い順番で並べているが、大坂の旭山は主催者であるから別としても、江戸の藍水、京都の元周といったように、地域ごとに出品数の多い者がいたことが分

表6 宝暦10年「薬物会」(大坂)の出品者一覧

地域	名前	出品数	宝暦11年 「薬品会」 (京都)	宝暦7~ 12年 「薬品会」 (江戸)	宝暦12年 三浦迂齋 旅行	安永8~ 享和2年 兼葎堂 交遊
大坂	戸田斎(旭山)	50			○	
	渡部主税	5		○	○	○
	都賀六蔵	3				
	山田正因	3				
	赤沢恭節	2				
	植木屋佐兵衛	2				○
	木下字兵衛	2				?
	村吉右衛門(兼葎堂)	2				本人
	小芝新助	2				○
	中村東圭	2				
	中村藤兵衛	2				
	林 隆菴	2				△(息子)
	古林杏節	2				
	松井吉助	2				
	森 立軒	2				
	植木屋莊右衛門	1				○
	大山正因	1				
	岡 桐茂	1				?
	桂川一馬	1				
	久保津敬元	1				
沙田八右衛門	1					
白井道順	1					
武中周蔵	1					
武田三迪	1					
丹波屋伊兵衛	1					
豊嶋杏伯	1				○	
藤木文庵	1					
古林正甫	1					
松屋甚兵衛	1					
宮城玄忠	1				○	
三木東洲	1					
森 衆允	1					
矢木俊越	1					
山田順菴	1					
行松春菴	1					
河内	寺島樂山	3				
	坂戸孫三郎	2				○
	重岡見昌	2				
	田中清右衛門	2				
	戸村宇左衛門	1				
吉田與二兵衛	1					
摂津	上嶋無動	2				
	介中拙斎	2				
	坂上伊兵衛	1				
京都	直海元周	4(6)	○		○	
	植木屋政右衛門	3				
	鶴橋主人	2				?
	松下金六	2				
植木屋祐十郎	1					
山城	片岡志摩	3				
奈良	藤田七兵衛	2	○			
	安倉茂左衛門	2	○			
	和角養軒	2	○			
	井上平五郎	1	○			
	尾西伊兵衛	1				

地域	名前	出品数	宝暦11年 「薬品会」 (京都)	宝暦7~ 12年 「薬品会」 (江戸)	宝暦12年 三浦迂齋 旅行	安永8~ 享和2年 兼葎堂 交遊
大和	森野賽郭翁	20				
	内田七右衛門	3		○		
尾張	水室左近	2		○		
江戸	田村元雄(藍水)	3		○	○	
	藤本立仙	3				
	石川玄丈	2				
	岡 了伯	2				?
	河野亮達	2				
	松田長元	2		○		
	宮村永隆	2				
	岡田養仙	1		○		
	後藤黎春	1		○		
	田村元長(西湖)	1				
	福山舜調	1				
	古川章甫	1		○		
	福山喜安	1				
上総	青柳仙安	1				
水戸	志水周安	1				
美濃	今井田三右衛門	2				
	澤 東宿	1		○		
若狭	中川純亭(淳庵)	2			○	
越中	逸見喜右衛門	2	○			
越後	大口玄周	1				
丹後	中久喜玄常	1				
播磨	藤田養菴	8				
	大平宗本	2				
	樋口仙安	2				
備前	某氏	1				
安芸	村上周格	2				
紀伊	三木恒斎	3				
	山瀬次右衛門	3				○
	志摩重蔵	2				?
	宮田七郎右衛門	2				
	橋本仙質	1				
讃岐	平賀源内	6		○	○	
	池田玄丈	4				
	入江只彦	2				
	久保桑閑	2				
	柴野氏	2				
	杉原養倫	2			○	
	玉越勝運	2				
富山得水	2					
長尾謙定	2	○				
藤木立股	2					
三好喜右衛門	2		○			
長崎	柳 隆元	2				○

「地域」欄は、当時の所在地を示すものではない。たとえば平賀源内は当時江戸に住んでいた。

同一人物と認定しがたい場合、「?」で示した。

「文会録」、「精鞭餘録」、「物類品譜」、「東海濟勝記」、「兼葎堂日記」をもとに作成

かる。旭山の博物会はこのような中心人物に協力を仰ぐことで各地からの物産を集めることに成功したのである。実際、藍水と当時江戸住まいであった源内は「東都社中」として二十二名の物産を、元周は「京師社中」として十三名の物産を、それぞれ取りまとめて旭山に送付している(表七)。このような人物たちは、宝暦年間における博物収集ネットワークの地域的な中心として位置づけることができる。

宝暦十年の薬物会は全国から出品されており、その意味で当時を代表する物産会であった。しかしながら、表六で確認できる人物やその集まりが、当時の博物収集のネットワークを網羅しているわけでは決してない。それが端的にうかがえるのが、薬物会とその翌年に京都で開催された薬品会における出品者メンバーの異同である。

宝暦十一年の薬品会は、周防国岩国藩の藩医豊田養慶子禎が京都東山の雙林寺を会場に開催したものであり、その出品目録『精鞭餘録』(一七六一刊)には、出品者三十五名が列記されている。京都在住の者が大部分を占め、その他の地域からの参加は近江・大和・美濃・越中・阿波・讃岐・周防となっている(表八)。

宝暦十年と十一年の両方の物産会に出品したのは七名である(表六)。このうち、四名は奈良からの出品者であり、残る三名は元周および元周が宝暦十年に「京師社中」として取りまとめた者たち(表七)である。すなわち、奈良グループと京都の元周グループが宝暦十一年の薬品会にも参加した一方、藍水や源内を中心とした「東都社中」(江戸グループとも呼べるであろう)はもちろんのこと、京都での開催にもかかわらず、旭山や吉賢を中心とした大坂グループとも言うべ

表7 宝暦10年「薬物会」出品にみえる2つの社中

東都社中	『文会録』注記
田村元雄 (藍水)	東都
田村元長 (西湖)	東都
藤本立仙	官医
岡田養仙	官医
岡 了伯	官医
宮村永隆	官医
志水周安	水戸侯侍医
後藤黎春	東都
松田長元	東都
福山舜調	東都
大口玄周	高田侯侍医
古川章甫	東都
中川純亨	小浜侯侍医
澤 東宿	郡上侯侍医
青柳仙安	大多喜侯侍医
福山喜安	東都
樋口仙安	姫路侯侍医
石川玄丈	東都
大平宗本	姫路侯侍医
河野亮達	東都
中久喜玄常	宮津侯侍医
平賀源内	讃州人寓学于聖堂, 高松侯賜学資月俸数口

京師社中	『文会録』注記
直海元周	平安
植木屋政右衛門	平安
三木恒斎	紀侯侍医
逸見喜右衛門	越中州北野村
村上周格	芸侯侍医
植木屋祐十郎	平安
鶴橋主人	平安
松下金六	平安
藤木立股	高松侯侍医
杉原養倫	高松侯侍医
玉越勝運	高松侯侍医
片岡志摩	八幡
長尾謙定	高松侯侍医

人物の記載順は『文会録』に準じている。
『文会録』をもとに作成

表8 宝暦11年薬品会(京都)の参加者一覧

	地域	職	名前
1	平安	-	南部自安
2	平安	薬舗	-
3	高松	高松医官	長尾謙定
4	平安	薬舗	-
5	平安	芸種家	助五郎
6	平安	-	青木謙益
7	阿波	阿州医官	玉養道意
8	阿波	阿州医官	乾 来庵
9	阿波	阿州医官	堀 玄珪
10	美濃	巖邑医官	熊谷玄且
11	美濃	巖邑医官	朝枝桃軒
12	美濃	巖邑医官	都野健順
13	周防岩国	-	藤兼壽軒
14	平安	-	富勢氏
15	江州	-	西澤源蔵
16	平安	-	平野慎蔵
17	洛東	-	渡邊孝淳
18	南都	-	藤田七兵衛

	地域	職	名前
19	南都	-	和角養軒
20	南都	-	井上平五郎
21	南都	-	安倉茂左衛門
22	平安	-	和田春庵
23	平安	-	吉田市郎兵衛
24	平安	薬店	-
25	平安	-	官田正允
26	平安	-	廣澤仁左衛門
27	平安	-	鑑古堂
28	平安	-	益井市郎兵衛
29	讃州高松	-	藤木泰仲
30	讃州高松	-	赤澤左膳
31	平安	-	山本氏
32	平安	-	青木氏
33	平安	-	直海元周
34	越中北野村	-	逸見喜右衛門
35	周防岩国	会主	豊田養慶

人名の順番は『楮鞭餘録』による。『楮鞭餘録』より作成

きグループは参加しなかった。もちろん、逆のことも言え、京都の物産会を主催した養慶やその近しい人物は前年に大坂で開催された物産会には参加しなかったのである。

会の目的や規模によって参加者が異なるのは当然であるが、物産会への参加が地域的ないし社会的なグループごとになされる場合があったことは注目される。物産会開催の告知が伝達されるのもまたネットワークを通じてであり、その結節点に位置する者を中心として周囲の者が情報を受け取り、参加を決定していったという構図を見出すことができる。この構図をうまく使い、広範囲から出品物を集めたのが旭山であり、また源内であったということになるだろう。

(二) 中心に位置する人物の個性

源内がまとめた『物類品隣』は、江戸で開かれた全五回の薬品会に出品された二千点あまりの産物から約三百六十点を選び出した書である。先述のように、秀品でなければ人名は載せない、という方針がとられているため、三十一名の名前しか見出すことができず、薬品会全体の参加者については明らかにしえないが、秀品を所持していたという点から見て、この三十一人が当時の博物文化において中心的な役割を果たしていた可能性は高い(表四)。

もちろん、この書が源内によって編まれたものであることを忘れてはならない。先に源内と吉賢との関係を明らかにし、両者が親しい関係にあったことを確認した。『物類品隣』に見える人物も、これと同じく、源内と比較的近しい人物であった可能性を考慮する必要がある。

そして、このことは三十一名を一瞥するだけですぐにかがうことができる。源内によって厳選されたわずか三十一名の中には、サツマイモの試作を行い、『蕃薯考』を執筆してその栽培法を普及させた儒学・蘭学者の青木昆陽（一六九八—一七六九）、蘭癖大名として著名な肥後熊本藩主細川重賢（一七二二—一七八五）、オランダ通詞の吉雄幸左衛門耕牛（一七二四—一八〇〇）、そして後に『解体新書』を記す杉田玄白（一七三三—一八一七）など、旭山が開いた薬物会にはほとんど見られない蘭学系の人物が数多く登場するのである。⁴⁶ 源内とこれら蘭学系の人物たちとの密接な交友関係が代表的人物の選出に大きく影響していることは明らかだろう。

このように、主催者の親しい交友ネットワークの違いが、物産会それぞれの特色の違いとして顕れるのであり、京都の薬品会も含め、ほぼ同時期に開催された三都の物産会はそれぞれに個性を備えた催しとなっていたことが分かる。ただ、その一方で、たとえば元周が大坂と京都の物産会それぞれに参加していたように、また吉賢や源内、藍水が大坂と江戸の物産会それぞれに参加していたように、地域的なネットワークの中心に位置した人物たちは、そのような地域的個性を越えて、さまざまな地域の物産会に積極的に参加していた点も重要であろう。というのも、地域的なネットワークが他の地域のそれと結びつき、さらには全国的なネットワークへと拡大する過程において、このような行動が極めて大きな役割を果たしたと思われるからである。

（三）紀行文『東海濟勝記』にみえる博物収集のネットワーク

この点をさらに明確にするために、別の資料を検討しておきたい。使用するのは、三浦迂齋（元礼とも。一七〇二頃—一七六七）が、宝暦十二年（一七六二）四月から八月まで東海、奥羽、北陸を旅行した際の紀行文『東海濟勝記』⁴⁷の前半部である。迂齋は、『物類品隲』の「海馬」（タツノオトシゴ）項に、

（史料十七）相模産一種赤色ノモノアリ、壬午〔宝暦十二年（一七六二）〕客品中播磨高砂三浦迂齋具之

とあり、宝暦十二年閏四月十日に開かれた第五回東都薬品会に秀品の「海馬」を出品したことが知られる人物である。金井によれば、⁴⁸ 迂齋は高砂で製塩業および海運業を営んでいた人物で、明石の儒者梁田蛭巖（一六七二—一七五七）や『播磨鑑』（一七六二）を記した医者・暦算家での平野庸脩（生没年不明）と交流を持っていた。その『播磨鑑』に迂齋は序を寄せている。そこには、

（史料十八）元禮「迂齋」自「壯歲」。而有志「吾播磨国之志」。而疎懶不果焉。年月于逝矣。⁴⁹

という文章が見え、迂齋自身が一時、播磨国の地誌作成を考えていたことが分かる。そして、庸脩が編纂したもう一つの地誌『播磨州輿地通志』⁵⁰には、迂齋の名が「三浦元礼参考」と記されており、実際に

播磨⁽⁵¹⁾の地誌作成に携わっていたこともうかがえる。いずれにせよ、迂齋は地理的な関心を強く持つ人物であった。

一方、蛻巖の「樹徳堂記」(「蛻巖集 後編」巻之六)に、

(史料十九) 吾友高砂の貨殖家三浦迂齋氏、少にして学を嗜み、博約にして志を為す、秘笈萬巻、研究に備ふ、一小堂を構え、之を命じて樹徳と曰う…(中略)…その清泉奇石、珍卉美竹、堂の左右に在り⁽⁵²⁾

とあることから、貨殖家にして書物を大量に蔵し、清泉(古銭)や奇石、珍草、美竹といったものを収集する人物として著名であったこともうかがえる。特に奇石については強い関心を示していたらしく、同時代の石収集家として著名な木内石亭とは深い親交を結んでおり、石亭が記した石に関する図書『雲根志』には「三浦氏珍藏数百種」などの記述が見える。

また『東海濟勝記』に記される旅行から四年を経た明和三年(一七六六)に、京都の也阿弥で催された物産会では、石亭や兼葭堂とともに品評執事として活躍している。さらに、『東海濟勝記』に序を寄せた七名のうち、六名が本草に関心のあった者たちである⁽⁵³⁾。これらのこともふまえて考えると、迂齋が播磨地域の博物学ないし博物収集のネットワークの代表的な人物であったことがうかがえるだろう。

『東海濟勝記』に見える旅行の目的は「西行や芭蕉の旅を辿って、

歌枕や勝地を探り、吟詠を楽しむこと⁽⁵⁴⁾」および江戸の物産会に参加することであった。実際、旅の途中に立ち寄った大坂・京都・江戸では物産会に関連する多様な人物と交流している(表九)。

迂齋は四月十五日に高砂を出発し、夜更けに大坂にたどり着いた。そして翌日は次のような行動を取っている。

(史料二十)「四月」十六日

天満宮の社にまうず。御あかしなど捧て、旅路のねぎごとし、神司渡邊氏の方にまかり、しかじかもの語し、奥羽の道しるべなど書たるを出して、我もいつかは行ミン為に、人のしるせるを乞もとめてひめ置ぬとて、かしくれられぬ。盃酌せられなど、ときうつれば、いとま乞て出つ…(後略)

旅の安全を願って天満宮に参拝し、その後、吉賢を訪ね、吉賢から奥羽の案内記を見せてもらい、また盃酌を受けている。天満宮が旅行者を惹きつける場所として機能していることも興味深いが、迂齋の場合、旧知であった吉賢を訪問することも天満宮訪問の一つの目的となっていたことがうかがえる。

十七日は日暮より淀川を遡り、京都に向かったが、日中には何名かを訪ねている。その一人に大坂の博物収集のもう一人の雄、戸田旭山がいた。

表9 三浦迂齋の宝暦12年(1762)4月~閏4月の旅程

日付	発	泊		主な訪問・面会者
4月15日	高砂	大坂	高砂で送別をうけ、船で夜更けに大坂に	
4月16日	-	大坂		渡邊吉賢, 宗圓
4月17日	大坂	(船中)	夜に淀川遡上	戸田旭山, 留守希齋
4月18日	伏見	京都		
4月19日	-	京都		小畑某
4月20日	-	京都		坊城前亞相卿, 陶山南濤, 沢田一齋, 岡田巴淵, 松岡仲良
4月21日	-	京都		禪林寺貫首大和尚
4月22日	-	京都		誓願寺大和尚, 直海元周
4月23日	京都	草津	蹴上で送別をうけ、京都を発つ	直海元周
4月24日	草津	坂の下		
4月25日	坂の下	四日市		
4月26日	四日市	名古屋	熱田神宮で旧友賀嶋宗叔に偶然会う	賀嶋宗叔
4月27日	名古屋	池鯉鮒	賀嶋の滞在の誘いを断り、名古屋を発つ	
4月28日	池鯉鮒	吉田		
4月29日	吉田	濱松		
4月30日	濱松	乾		
閏4月1日	乾	掛川	秋葉山参詣	
閏4月2日	掛川	藤枝		
閏4月3日	藤枝	江尻		
閏4月4日	江尻	由井	富士川増水のため渡れず	
閏4月5日	由井	蒲原	富士川増水のため渡れず	
閏4月6日	蒲原	三島		
閏4月7日	三島	大磯		
閏4月8日	大磯	江の島		
閏4月9日	江の島	戸塚		
閏4月10日	戸塚	江戸	日暮に江戸着	
閏4月11日	-	江戸		平賀源内
閏4月12日	-	江戸		平賀源内, 田村藍水
閏4月13日	-	江戸		伊勢屋, 松本, 永峯, 中村, 平山藤右衛門
閏4月14日	-	江戸	本草会に出席	平賀源内, 田村藍水
閏4月15日	-	江戸	歌舞伎鑑賞	
閏4月16日	-	江戸		姫路侯
閏4月17日	-	江戸	神田・湯島・根津・上野・浅草参詣	平賀源内, 中川淳庵
閏4月18日	-	江戸	歌舞伎鑑賞	阿部友之進, 山田宗俊
閏4月19日	-	江戸		田村藍水, 平賀源内, 阿部友之進
閏4月20日	-	江戸		姫路侯, 高田侯
閏4月21日	-	江戸	亀戸・秋葉山, 五百羅漢参詣	
閏4月22日	-	江戸		館林侯, 近藤貞印, 中川淳庵
閏4月23日	-	江戸		
閏4月24日	-	江戸		高松侯, 杉田養倫
閏4月25日	-	江戸		姫路侯
閏4月26日	-	江戸	病気で一日臥す	松本作兵衛
閏4月27日	-	江戸		出石侯, 杉立章庵
閏4月28日	-	江戸	諸所に暇乞い	
閏4月29日	江戸	草加	江戸を発ち奥州へ。帰郷は8月12日。	

『東海濟勝記』をもとに作成

(史料二十二)「四月」十七日

戸田老翁を尋ね、江戸に至りなバ物産の会に誘うなど
しばらく時うつり、盃取出て、馬のはなむけせらる。

迂齋は旭山と江戸での物産会についての話などで語らい、吉賢訪問
時と同じく、旭山から饒別の盃を受けている。迂齋は吉賢と旭山とい
う、当時の大坂における博物収集のネットワークの中心に位置する二
人をわずかに二泊の大坂滞在のなかで精力的に訪ね、旧交を温めると同
時に、情報交換を行っていたのである。

京都でも重要な人物に出会っている。直海元周である。⁽⁵⁵⁾

(史料二十二)「四月」廿二日

(前略) …それより又直海氏を訪ふ。此先生はとしごろ
のよしミあれば、わが旅宿えもたび／＼訪はれ、予も
あまた、び行ぬ。先生送別の詩五首おくらる…(後略)

元周とは「としごろのよしミ」があり、相互の訪問が頻繁にあった。
元周は、二十二日に詩(五言絶句)五首に添えて「行装の具五種」も
迂齋に贈っており、また次の日の京都出立時にも蹴上まで見送り、送
別歌を詠むなかで、帰った折には土産話を聞かせてくれるよう迂齋に
求めている。ただし、迂齋は帰路にも京都で一泊しているものの、こ
の時は、

(史料二十三)「八月」七日

…(前略)友人の方へもまからずたちて、ほどふる故
郷の覚束なき、今ハひと日ふた日のほど、思ふにいと、
恋しくて、いそぐ心のミすすみて…(後略)

というように、訪問はしていない。その後、改めて元周と会ったかど
うかは不明である。

このように、帰路では早々に京都を後にした迂齋であったが、次の
日に大坂に着いた際には、そのような急ぐ旅路であっても天満宮に参
詣し、吉賢を訪ねている。

(史料二十四)「八月」八日

大坂井上某が許につき、天満宮へまうで、渡邊氏をた
づねぬれど、外へ出て逢はず。

吉賢が外出しており、対面はできなかったが、迂齋の中で吉賢の位
置づけが理解されよう。

さて、先に帰路について触れてしまい、旅程が前後してしまつたが、
四月二十三日に京都を発った迂齋は、熱田神宮で旧友に偶然出会い、
名古屋での滞在を進められている。しかし、「末にいそぐ事ありしほ
どに」として断り、先を急いでいる。ここで言う「末にいそぐ事」と
は閏四月十日に江戸で開かれた物産会(第五回東都薬品会)のことに
他ならない。ただし、富士川増水による足止めのために、江戸到着は

結局物産会当日の日暮れ近くとなつてしまい、物産会自体への参加は叶わなかった。

翌日の十一日の記述は次のようなものである。

(史料二十五) 「閏四月」 十一日

平賀氏をたづねぬれば、きのふ湯島にて、群産会席を開き、五畿七道より、ことごとく薬物石鳥獸異類形の品物集る。侯伯の国々よりも出ぬれば、希代の壯観なるに、これにをくる、事哉あると、大にいさめられぬ。予もかねて諾し合せし事にしあれば、此会を専に心がけしかど、思はずも雨に隔られて怠し事をくゆ。されどもいまだ多く会席へ出しもの、あまた残りあれば、見物しぬ。此会にをくれし事、社中の諸賢のりいかりぬれど、ぜひなし。藍水先生田村玄雄、讃岐鳩溪先生平賀国倫会主たりし。

迂齋は、物産会に間に合わなかったことを源内から「大にいさめられ」た。迂齋自身も後悔の情を吐露しつつ、片付けられずに残されている物産を見物している。

このように旅の目的の一つであった物産会参加を逃してしまった迂齋であったが、江戸ではそれに優るとも劣らない重要な経験をしている。それが博物収集家との交流である。源内や藍水はもちろんのこと、徳川吉宗の薬物採取政策のなかで採葉使として活躍した阿部友之進、

藍水の弟子で「物類品隲」を校訂し、後に「解体新書」翻訳にも参加した中川淳庵などと親しく交わっている(表9)。

また物産会に参加した各地の人物とも交流している。このうち、平山藤右衛門との交流についてみておく。なお、この藤右衛門は伊能忠敬の養父として、地理学史にもわずかに顔を出す人物である。

(史料二十六) 「閏四月」 十三日

(前略) …この夜下総国中村といふ所にすめる、平山藤右衛門といふ人、予が旅宿えたづね来らる。此人も此度の会に出会せる人にて、きのふ田村先生の許にて参会しぬ。…(中略) …下総国の産物、海鏡、石髓などめぐまる。即此度の会に出されし、奇物なり。…(中略) …予火照炮といふもの、其餘珍奇のもの、二三種をあたふ。…(中略) …「火照炮は」江戸にて高松侯、出石侯、阿部侯などものぞませ給ひて、奉りぬ。此平山氏逗留中、たびく来とぶらハれつ。和歌などめぐまる…(後略)

迂齋は十二日に「田村、平賀両先生のもとにまいりて」語らっているが、そこで藤右衛門と出会った。そしてその翌日藤右衛門が迂齋の旅宿を訪ね、それぞれ所有する珍奇な品を贈呈している。その後、藤右衛門は何度も迂齋の旅宿を訪ね、交流を深めていたようである。物産会は単に産物が集まるのみならず、普段は交流することのない遠隔

の博物収集家どうしの交流を生む機会ともなっていたのである。その仲介役となったのが源内や藍水であったのは言うまでもない。

このほか、迂齋は各藩の江戸屋敷にも参上し、博物趣味をもつ藩主とも交流している。たとえば、

(史料二十七) 「閏四月」二十四日

高松侯御珍藏の宝石珍奇のもの拝見し、御饒など賜ひて、暮がたに帰る。予のも奇品三種奉りぬ。医官杉田養倫紹介せらる。

とあるように、高松藩主松平頼恭(一七二一—一七七二)から所蔵品を見せてもらい、饒別をもらい受ける一方、自身も「奇品三種」を献上している。そのひとつが藤右衛門にも提供した「火照炮」だったのだろう。もちろん、讃岐国出身の源内を介した交流であった。また、その場で高松藩医官の杉田養倫⁶⁶を紹介されており、迂齋は自らの博物収集のネットワークをさらに広げている。同じようなことは、出石侯との交流などでも確認できる。

このように、迂齋は、奥州に向かう旅の途中、大坂・京都・江戸の三都それぞれの代表的な博物収集家を訪ね、彼らとの交流を深めると同時に、そこで新たな人物と出会っていた。地域の中心的役割を担う迂齋にとって、これら三都の中心的役割を担っていた人物との交流は、産物に関する知識の交換のほかに、新たな人物との交流の契機ともなっていたのである。中心的役割を担う者の個性によって、特色ある

地域ネットワークが形成されることはすでに確認したが、『東海濟勝記』に見えるような地域を超えた知識人の交流は、そのような各地域にあった個性的な小規模ネットワークを連結していく役割を果たしていくものであったことを明確に示している。

博物収集のネットワークを模式的にとらえるならば、中心的役割を担う人物を中心とした地域内の交流と、三都に居住する人物を中心とした中心的役割を担う者どうしの地域間の交流によって成り立っていたとすることができようであろう。

五 博物収集の文化と地図くむすびにかえて

これまでに得られた結果をふまえて、十八世紀の知識人の地図収集を改めて考えると、どのようなことになるだろうか。

前稿では吉賢や宗明が「図を好む」人物であった事実を指摘したが、当時の社会においてはむしろ貝や古銭の収集で著名な人物であった。兼葭堂や源内も地図を好んでいたものの、それだけではなく博物の収集に取り組んでいた。そして十八世紀中葉には博物収集のネットワークが三都を中心として形成されており、広範囲な収集ネットワークのなかで多種多様な産物が収集されていた。地図はその「博物」の中にあくまでも一つにすぎない。もちろん、当時から地図のみに専心した人物も想定できないわけではないが、全体として見れば、(地図を含めた)あらゆるモノを収集・追究しようとした文化であったこととなる。前稿で見た地図収集のネットワークは、このような博物収集の文

化のごく一部を切り取った形であったのである。

これまで地図の文化的側面については、地図学的関心からの研究が多く、地図の系譜の解明に重点が置かれてきた。そのような研究状況にあつて、十八世紀の地図収集はそれだけが独立した文化的営為ではなく、同時代の他の文化的営為と軌を一にしたものであつたことを示した本稿の成果は、十八世紀の地図文化という問題が地図という限定的な範囲に収まるものではなく、広大な射程を含むものであることを示すことができた点で、一定の役割を果たしうるものとなつたのではないだろうか。もちろん、議論をより重ねていく作業は不可欠であるが、これまで線的にしかとらえられてこなかつたものが、面的な広がりをもちとらえることが可能となつた意義は少なくない。

ただし、本稿の検討には不足している側面がある。本草学に起源を発する博物学的関心において収集品は第一義的には薬物である。それは貝や古銭にも当てはまるものであり、薬品会や薬物会という名称で物産会が開かれていたことから、収集品＝薬用に端を発するもの、という意識は十八世紀中葉の社会には少なからずあつたと思われる。しかし、地図それ自体に薬効を求めることは難しいだろう。本稿で得た博物収集文化と地図収集は、実は安易に交わらせることはできないのである。

この点を明らかにするためには、博物学的関心が知識人の中に浸透していく中にあつて、なぜ地図は収集対象品となりえたのかという問題意識、言い換えれば、博物収集と地図収集が結びついた思想的・社会的な背景についての理解が不可欠であろう。この点については、稿

を改めて取り組むことにしたい。

付記

本稿の内容の一部については、日本史研究会二〇〇六年五月例会、および歴史地理学会第五一回大会で報告した。その際に会場から貴重な意見を賜つた。末尾ではあるが謝意を表したい。また、図版掲載にあつては、近畿大学中央図書館より許可を賜つた。あわせて謝意を表したい。

注

- (1) ① 鮎澤信太郎『日本文化史上における利瑪竇の世界地図』日本大学新聞社、一九四一、② 久武哲也・長谷川孝治編『地図と文化』地人書房、一九八九、③ 海野一隆『東西地図文化交渉史研究』清文堂、二〇〇三、④ 海野一隆『地図の文化史 世界と日本』八坂書房、二〇〇四。
- (2) 前掲1、③・④。
- (3) 地図の系譜に関する研究は一九七〇年代までにその基礎ができた。代表的なものを掲げる。① 秋岡武次郎『日本地図史』河出書房、一九五五、② 海野一隆ほか編『日本古地図大成』講談社、一九七二、③ 織田武雄『地図の歴史』講談社、一九七三、④ 織田武雄ほか編『日本古地図大成―世界図編』講談社、一九七四、⑤ 矢守一彦『都市図の歴史 日本編』講談社、一九七四、⑥ 船越昭生『北方図の歴史』講談社、一九七六。
- (4) 前掲1、①。

- (5) ①矢守一彦『古地図と風景』筑摩書房、一九八四、②矢守一彦『古地図への旅』朝日新聞社、一九九二。
- (6) ①三好唯義「いわゆる流宣日本図について」地図二七—三、一九八九、一—九頁、②三好唯義「貞秀・玉蘭斎ノート」、神戸市立博物館研究紀要一五、一九九九、③小野田一幸「鍬形蕙斎『日本名所の絵』を読む」、喜谷美宣先生古稀記念論集刊行会編『喜谷美宣先生古稀記念論集』喜谷美宣先生古稀記念論集刊行会、二〇〇六、五四七—五五九頁。
- (7) ①小野田一幸「刊行された日本図」、三好唯義・小野田一幸編『図説日本古地図コレクション』河出書房新社、二〇〇四、八四—一〇五頁、②三好唯義「江戸時代の地図出版」地理四七(六)、二〇〇二、一六一—二二頁、③俵 元昭「江戸の地図屋さん—販売競争の舞台裏」吉川弘文館二〇〇三、④京都大学大学院文学研究科地理学教室・京都大学総合博物館編『地図出版の四百年—京都・日本・世界』ナカニシヤ出版、二〇〇七。
- (8) ①拙稿「青年期本居宣長における地理的知識の形成過程」人文地理五五—六、二〇〇三、一八一—三九頁。②拙稿「端原氏城下絵図」について」鈴屋学会報一九、二〇〇二、一—一六頁。③拙稿「安永・天明期における春庭の修学 宣長の教育との関わり」鈴屋学会報二二、二〇〇六、一七一—三二頁。④拙稿「本居宣長の地図利用 日本図・世界図を中心に」、(藤井讓治・杉山正明・金田章裕編『大地の肖像 絵図・地図が語る世界』、京都大学学術出版会、二〇〇七)、三六八—三八七頁。⑤拙稿「地誌作成者としての森幸安」歴史地理学四七—四、二〇〇五、一三—三三頁。⑥拙稿「森幸安の地誌と京都歴史地図」、(金田章裕編『平安京—京都 都市図と都市構造』京都大学学術出版会、二〇〇七)、九九—一二二頁。⑦拙稿「一八世紀における地図収集のネットワーク 大坂天満宮祝部渡辺吉賢を中心に」地理学評論八〇—一三、二〇〇七、八二—一八四頁。
- (9) ①有坂道子「木村兼葭堂の交遊—大阪・京都の友人たち—大坂の歴史四六、一九九五、六三—七四頁。②有坂道子「木村兼葭堂と地図」(藤井讓治・杉山正明・金田章裕編『大地の肖像—絵図・地図が語る世界』京都大学学術出版会、二〇〇七)、三八八—四〇九頁。
- (10) 前掲8、⑦。
- (11) 前掲9、②。
- (12) 前掲8、⑦。
- (13) 国書刊行会『徳川文藝類聚 第十二』国書刊行会、一九一四、三七—五頁。
- (14) 大阪市立博物館編『館蔵資料集一七 奥田コレクション—地図・絵図—』大阪市立博物館、一九九〇。
- (15) 「江戸化学古典叢書四五 博物学短編集 下」恒和出版、一九八二、五一—六八頁。
- (16) 平賀源内先生顕彰会『平賀源内全集 上』名著刊行会、一九八九、一一—八四頁。
- (17) 前掲15、二九—三〇頁。
- (18) 「知の巨人」は兼葭堂の没後二百年を記念して大阪歴史博物館で開催された特別展で、兼葭堂に対して使用された称である。大阪歴史博物館編『木村兼葭堂—なぞの巨人—』思文閣出版、二〇〇三。
- (19) ただし、源内は「東都(江戶)社中」の一員として出品している。
- (20) そのことは『文会録』に載る「会例」の他、「薬物会請啓」中に出品数を限定する文言が何度も出てくることから分かる。前掲15、二七一—三二頁。
- (21) 「六物新志」は兼葭堂蔵版であり、兼葭堂がその刊行に携わっている。また、『難波晰』の安永三(一七七四)年十月二十二日条に、兼葭堂がエブリコを所持していたこと分かる記事がある。なお、『難波晰』は次に収載されている。森銑三他編『随筆百花苑 十四』、中央公論社、一九八一。
- (22) 前掲16、一〇六頁。
- (23) 前掲16、一〇頁。なお、原文は漢文体であるが、書き下した(以下同)。
- (24) 現在、兼葭堂旧蔵模写本が西尾市岩瀬文庫に所蔵されており、そこには兼葭堂による加筆の痕跡も確認できる。
- (25) ①藤田彰一「平賀源内の実像に近づぐための新しい断片」、芳賀徹監

- 修『平賀源内展』東京新聞、二〇〇三、一六一―三三頁。②三好唯義「源内焼の地図皿について」、五島美術館学芸部・愛知県陶磁資料館学芸部編『源内焼―平賀源内のまなざし』五島美術館、二〇〇三、一八〇―一八四頁。前掲9、①・②。
- (26) 芳賀徹監修『平賀源内展』東京新聞、二〇〇三、一六一―三三頁。
- (27) 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成 第一期』十四 吉川弘文館、一九七五、一七頁。
- (28) 『都記』には福井崇蘭館(榕亭)・富岡鉄斎(一八三六―一九二四)の落款も認められる。なお、二〇〇三年に開催された第六十一回伊勢丹新宿店大古本市の出品目録によると、崇蘭館は渡辺吉賢が記した書物(堤朝風筆・菅原吉賢筆(別巻))「神祇伯家葬送古図 一卷(附別巻)」も収蔵していたようである。
- (29) 前掲1、③、三九八―四一九頁。
- (30) 前掲9、②。
- (31) 前掲9、①。
- (32) 前掲21、八九頁。
- (33) 中村真一郎『木村兼葭堂のサロン』新潮社 二〇〇〇、三四五―三四六頁。
- (34) 大阪府立図書館編。『大阪資料叢刊 第一 迦遊従之』大阪府立図書館、一九七二、八頁。
- (35) 浪速古図については、拙稿「近世における浪速古図の作製と受容」史林八五―二、二〇〇二、三三―三七頁。
- (36) 高知市民図書館蔵「葭屋坐右帖」。ここでは下記の資料に依った。瀧川義一・佐藤卓彌編『木村兼葭堂資料集 校訂と解説(一)』蒼土舎、一九八八、二〇一頁。
- (37) 前掲9、②。
- (38) 日本随筆大成編輯部『日本随筆大成 別巻七 嬉遊笑覧』吉川弘文館、一九七九。
- (39) 東京都立中央図書館蔵。ただし、宗明自筆本ではなく、模写本と考えられる。
- (40) 益軒会編『貝原益軒全集』巻之六、益軒全集刊行部、一九一一、八三頁。
- (41) 大坂の伊勢屋新兵衛版の他、同じく大坂の誉田屋伊右衛門版が確認されている。また安永五年にも再版されている。
- (42) 願山は他にも「富嶽之記」(享保十八年)という紀行文も残している。もと漢文。書き下し文は以下の書に依った。沼田次郎・松村明・佐藤昌介校注『日本思想体系系四 洋学 上』岩波書店、一九七六、三二七―三三八頁。
- (43) 本書は、地動説を日本で初めて紹介した刊行書ともなっている。海野一隆『日本人の大地像 西洋地球説の受容をめぐる』大修館書店、二〇〇六、一七五―一七六頁。
- (44) 財団法人開国百年記念文化事業会編『鎖国時代日本人の海外知識』乾元社、一九五三、九二頁。
- (45) 『文会録』に見える人物で蘭学に造詣が深い、ないし後に深くなる人物としては、中川淳庵と源内、そして兼葭堂を挙げることができる。このうち、源内・淳庵は「江戸社中」の一員であることに注意したい。
- (46) 大阪府立中之島図書館蔵。本稿では下記に所収される翻刻本を利用する。森銃三ほか編『随筆百花苑 十三』中央公論社、一九七九、一一五―一二三頁。
- (47) 金井寅之助「東海濟勝記 校訂解題」(森銃三ほか編『随筆百花苑 十三』中央公論社、一九七九、四一―四一八頁。
- (48) 『播磨鑑』撰陽群談(上)、歴史図書社、一九六九、一一二頁。
- (49) 国会図書館蔵。
- (50) ただし、現存する『播磨州輿地通志』は播磨国全体ではなく、加古・印南二郡の部分しかない。
- (51) もとは漢文。黒田義隆編『梁田崦巖全集』本立寺、一九九六、一六八―一九九頁。
- (52) 前掲47、四二―四一三頁。
- (53) 前掲48。
- (54) 金井氏は四月二十二日条にみえる「松岡先生」について「物類品鑑」

に多出する松岡先生か」(前掲45、四一三頁)と述べ、本草学の代表的人物の一人松岡恕庵に比しているが、恕庵は延享三(一七四六)年に没しているので別人である。字が「雄淵」であることから、山崎闇齋系統の神道家、松岡仲良(二七〇〇—一七八三)であると思われる。『文会録』には杉原養倫とある(表六を参照のこと)。

(二〇〇八年九月三〇日受理)

(うえすぎ かずひろ 文学部講師)